

# 人の科学・人間科学・社会科学

佐 藤 幸 治

モスクワ大学の心理学の教授として世界的に名のあるルリア (A.R. Luria) 博士は1966年の *Psychologia—An International Journal of Psychology in the Orient*—第9巻の巻頭に発表した論文で *Наук о человеке* を自ら *behavioral science* と英訳している。行動科学は米国科学だからなどと反撥を続けてきた日本の学者もあったと聞いているが、人の問題は自然科学技術が目覚ましい発展を遂げ、その跛行は人類の破滅を招く危険性をも含むことが自覚されるにつけ、米国だけでなく、反対陣営とも見られるソ連でも重大視されるに至り、“人の科学”が問題となり、“行動科学”が論ぜられるようになったのも、当然といえば当然である。筆者が戦時中「哲学研究」に書いた“気の間人技術学”，戦後間もなく出版した“気とモラール—人間総合科学への道—”を貫く立場は、人間を変化、向上させるためには人間諸科学の総合協力が必要であるとするものであったが、その後、同じような動きが米国においても、戦争中に生じていたことを発見して興味深く思った。レヴィン (Kurt Lewin) のグループ・ダイナミックスなどの運動がこれであった。彼は「第二次大戦の副産物で、原子爆弾と同じように革命的であったものは、ソーシャル・サイエンスにおける発展である」と述べて、集団力学の意義を強調したのであった。これに関連する研究施設としては、レヴィンを中心としたマサチューセッツ工科大学 (M. I. T.) の“グループ・ダイナミックス研究センター”，ハーバード大学の“ソーシャル・リレーションズ学部”，さらにその先駆としては1930年頃から活動を始めたイエール大学の“ヒューマン・リレーションズ研究所”があった。

新制大学は戦後間もなく、十分な準備も研究もなしに、占領軍の下に急遽、発足することになったが、京都大学としては教育学の講座の急速な膨脹にもかかわらず、社会学、心理学の講座は各々一講座づつ文学部、教育学部に分散していたので、教育学部と文学部の心理学、社会学を併せて、新しい体制の学部を発展させるべきではないかとの構想は、新制大学発足後間もなくから教育学、心理学、社会学の教官有志で話合われていたが、いろいろな因縁でこのすぐれた構想もそのままとなり、空しく十年余りの年月が過ぎ去ってしまった。しかし最も遅く文学部の発足した大阪大学が、独立した教育学部をもっていなかっただけ却って問題も少く、人間科学部の構想を具体化し、実現の第一歩を踏み出すこととなった。私はこのさい、人の科学の体系を概観しておう論考を試み、将来の発展のための参考資料を提供しておきたいと思う。

人に関する科学の名称としては各国語に類似の言葉があり、その間、国語によるニュアンスの相違も相当あると考えられる。例えば、*Anthropologie, science of man, human science, sciences*

humaines, behavioral science, social science, Sozialwissenschaft, Kulturwissenschaft, Geisteswissenschaft, 人類学, 人間学, 人理学<sup>1)</sup>, 人の科学, 行動科学, 人間科学, 社会科学, 文化科学, 精神科学等である。このほか新明正道編“社会学辞典”によれば human science を高田保馬博士などは“人事科学”と訳していたこともあったようである。レヴィンの著書“Resolving social conflicts”“Field theory in social science”が“社会的葛藤の解決”, “社会科学における場の理論”と訳されているが, “social”の類語としては“societal”があり, この方こそ“社会 society の”即ち“社会的”と訳すべきで, social は“对人的”と訳する方が妥当と見られる場合の少ないことにも注意せねばならぬ。“社会科学における場の理論”を繙いてみて, 政治学や経済学が中心でなく, 心理学が中心になっていることに失望して, これは社会科学ではないと不満をもらした他の領域の学者も居った。以前は日本語や日本人の思考様式がややもすると西洋のものに比べてプリミチヴ, 又は未分化, 未発達な面を多くもつかのごとく見られていたものが, その後, 現実の事態に即して見直おされてきている事実<sup>2)</sup>に注目し, 人に関する学問の体系においても, 特に“人間”という日本語の含蓄を, 改めて考慮すべきである<sup>3)</sup>と考えるものである。その意味で和辻哲郎博士の名著“人間の学としての倫理学”における人間という言葉の分析に注目し, 学ぶべきものを学びたいと思う。簡単に要約しては意を尽し得ぬと考えられるので, 長文になるが, その説明の重要な部分を引用させて頂く。

「人間」という言葉は今漠然とヨーロッパ語の *anthrōpos, homo, man, Mensch* などに当てて用いられている。しかしまた同時に「人」という言葉も同様の用法において用いられる。では「人<sup>にん</sup>」という言葉に「間」という言葉を結びつけたのは何を意味するのであろうか。あるいは何の意味もないのであろうか。ドイツの社会学者は「人」と「間」との二語を結合することによって, すなわち *Zwischen den Menschen* あるいは *das Zwischenmenschliche* という言葉によって, 人間関係を社会とする一つの立場を言い現わしている。しかるに日本語においては, 「人」も「人間」も何らの異なる意味を現わし得ないのであろうか。

もしそうであるならば日本語ほど働きのないものはないと言わねばならぬ。しかし事實はそうでない。言葉自身が異なる意味を現わし得ないのでなく, 言葉を用うる「人間」自身<sup>4)</sup>がその意味を混同したのである。現代に広く行なわれている字書『言海』がこのことを明白に語っている。すなわち人間とは「よのなか」「世間」を意味し, 「俗に誤って人の意となつた」のである。しかれば人間という言葉の本意義はドイツ人のいわゆる *das Zwischenschliche* すなわち社会にほかならず, それが誤って *der Mensch* の意に転化し, 両語の区別が無視せられるに至つた, ということになる。しかし「人の間」すなわち人間関係を単に「人」の意に解するという「誤り」は, あまりにも思索能力の弱さを示しはしないであろうか。少なくともドイツの関係社会学者は, *das Zwischemenschliche* を *der Mensch* の意に誤解する人に対して, とともに論ずることを欲しないであろう。我々は「人間」という言葉を「人」の意に解する限り, 右のごとき誤解の責めを負うべきなのではなからうか。

しかしこの「誤解」は単に誤解と呼ばれるにはあまりに重大な意義を持っている。なぜならそれは数世紀にわたる日本人の歴史的生活において, 無自覚的にはあるがしかも人間に対する直接の理解にもつづいて, 社会的に起こつた事件なのだからである。この歴史的な事實は, 「世の中」を意味する「人間」と

1) 佐久間鼎博士の用語

という言葉が、単に「人」の意にも解せられ得るということを実証している。そうしてこのことは我々に対してきわめて深い示唆を与えるのである。もし「人」が人間関係から全然抽離して把握し得られるものであるならば、Mensch を das Zwischenmenschliche から峻別するのが正しいであろう。しかし人が人間関係においてのみ初めて人であり、従って人としてはすでにその全体性を、すなわち人間関係を現わしている、と見てよいならば、人間が人の意に解せられるのもまた正しいのである。だから我々は「よのなか」を意味する人間という言葉が人の意に転化するという歴史全体において、人間が社会であるとともにまた個人であるということの直接の理解を見だし得ると思う。

そこで我々は、人間という言葉の意味を歴史的に考察することによって、そこに我々の「人間」の概念を確立しようと試みるのである。

元来我々の用うる言葉の内 anthrōpos, homo, man, Mensch などに最もよく当たる言葉は「人」及び「ひと」である。すでにシナの古代において、人は「万物の霊」あるいは生物中の「最霊者」であり、人の人たるゆえんは二足にして毛なきことではなくまさに「弁（あるいは言）を持つこと」（荀子、非相篇）であった。この二つの規定はギリシア人が anthrōpos に与えた規定と明白に合致する。日本人はその文化的努力の初期においてかくのごとき規定を有する「人」の語を学び、そうしてそれに「ひと」という日本語をあてはめたのである。だから anthrōpos について言われることは厳密にはただ「人」についてのみ言われることであると解しなくてはならぬ。

しかしこの人という言葉も精密に見ればすでに anthrōpos や homo と異なった意味を担っている。それは「人」及び特に「ひと」が、おのれに対するものとしての「他」を意味するという点である。「ひと」の物を取るというのは anthrōpos の物を取るのではなくして「他人」の所有物を盗むことであり、「われひとともに」という場合には我れと Mensch とが並べられるのではなく自他ともにということが意味せられる。が、さらに他人という意味は不定的に世人という意味にまでひろげられる。「ひとという」とは man sagt と同じく世人はいうの意である。かかる用法においては「ひと」はすでに世間の意味にまで近づいている。たとえば「人聞きが悪い」とは世間への聞こえをはばかりるのである。かく「ひと」という言葉が我れに対する他者の意味からして世間の意味にまで発展するとともに、他方で、その他者に対するわれ自身が同様に「ひと」であるということもまた見失われてはいない。自分をからかう相手に対して「ひとをばかにするな」という場合のごときがそれである。この意味はわれ自身が他者にとってまた他者であることの理解から生じたものであろう。自分に対する干渉を斥ける場合に、「ひとのことを構うな」という。それは他人のことにかかわるなという意味を通じて、汝にとっての他人たる「我れ」にかかわるなという意を現わすのである。このことは同時にわれにとっての他者がまたそれ自身「われ」であることの理解を含むと言ってよいであろう。かく見れば「ひと」という言葉は自、他、世人等の意味を含蓄しつつ、すでに世間という意味をさえも示唆しているのである。

かくのごとき意味の含蓄は homo や anthrōpos には見られない。homo が複数において世間を意味し、あるいは今名ざした人を強調してさす場合に「彼」の意味に用いられるとしても、そこに明瞭に「他者」の意味が含まれているとは言えない。homo からその格の変化に添いつつ homme と on とを作り出したフランス人に至っては、homo における右のような両面の意味を引き離して別語としてしまった。同様にドイツ語においても、Mann の形容詞形から出た Mensch（人）は、同じ語から出た man（世人）と、全然別の言葉にせられている。英語はこの man を人の意に用いるとともに、そこから世人もしくはある人の意味を全然閉め出している。いずれを見ても「人」という言葉におけるごとく、自、他、世人等をともに意味するというようなことはないのである。

「人」という語のこの特殊な含蓄は、この語に「間」という語を添加して「人間」という語を作っても、決して消えて行くものではない。人間は単に「人の間」であるのみならず、自、他、世人であること

●●●の人間なのである。が、かく考えた時我々に明らかになることは、人が自であり他であるのはすでに人間の関係にもついているということである。人間関係が限定せられることによって自が生じ他が生ずる。従って「人」が他でありまた自であるということは、それが「人間の限定であるということにほかならない。人を人として規定するものが言葉であるということも、結局は同様の意味を持つと思われる。かく見れば人間という言葉が人の意に転用せられるのは、「人」という言葉の含蓄から考えても根拠なきことではない。(和辻哲郎全集第九卷13-17頁)

和辻博士によれば、シナにおいては人間とはあくまでも世間、人の世であって、結局「人」の意味への転用は生じなかったという。日本においてこの転用が進んだのは、仏教の輪廻の五界、即ち地獄中、餓鬼中、畜生中、人間、天上が、漢訳経典ではしばしば、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上というように二字をそろえて使われるようになり、人間社会を意味した「人間」という言葉が絶えず畜生という言葉と並べて用いられたことから、動物との区別において、「人」の意味を獲得したと見られるのである。

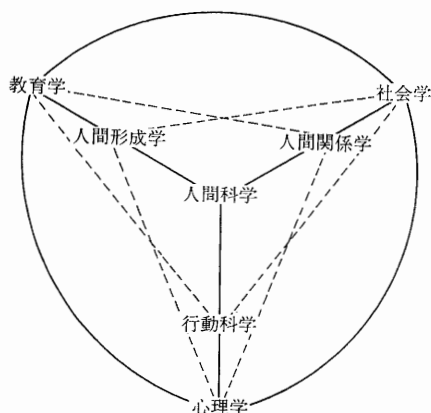
かくて人間学とも訳されているアントロポロジーという言葉も検討されてくる。

以上が「人間」という言葉の背負っている歴史的背景である。我々がかかえる言葉によって「人間」の概念を現わそうとする。人間とは「世の中」自身であるとともにまた世の中における「人」である。従って「人間」は単なる人でもなければまた単なる社会でもない。「人間」においてはこの両者は弁証法的に統一せられている。かかる「人間」の概念を我々は明白に *anthrōpos*, *homo*, *Mensch* などから区別して用いるのである。*Mensch* と *Gemeinschaft* とを何らか別個のものとして考えるということは、我々の「人間」の概念においては許されない。だから我々の「人間」の学は決して *Anthropologie* ではない。アントロポロジーは厳密に「人」の学である。共同態から抽象した「人」を肉と霊との二方面から考察するのがそもそもアントロポロジーの初めであり、従って身体論と精神論とがその課題の全部であった。自然科学の勃興は身体論を発展せしめてアントロポロジーの名を占領し、それを動物学の一分科たらしめた。「人類学」と訳せられるものがそれである。精神論は心理学として哲学的認識論に発展し、アントロポロジーの名を捨てた。だから哲学の立場において再び「人」を問題とし、身心の関係やあるいは一般に「人とは何であるか」を考究する場合に、人は「人類学」への区別から哲学的アントロポロジーと呼ばざるを得なかったのである。しかしこのような哲学的アントロポロジーといえども、「人間」の一つの契機たる「人」を抽象して取り扱うという点においては変わりはない。それはまさに「哲学的人類学」と呼ばれるべきものであって、人間学ではないのである。(同書20-21頁)

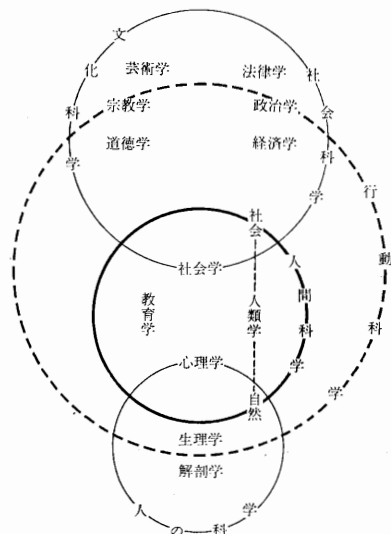
人間に対する言葉はまた世間である。

世間・世の中という言葉の右のごとき意味は、人間存在の歴史的・風土的・社会的性格を捉えたものとして十分尊重に価する。しかもそれが人間という言葉の本来の意義であったのである。そこで我々は右のごとき言葉の意味の上に世間・世の中の概念を作り上げる。世間あるいは世の中とは、遷流性及び場所性を性格とせる人の社会である。あるいは、歴史的・風土的・社会的なる人間存在である。

我々は人間の概念を、世の中自身であるとともにまた世の中における人であると規定した。今や右のごとく世間・世の中の概念が定まるとともに、我々は人間のこの側面を人間の世間性として言い現わすことにする。それに対して他の側面は人間の個人性と呼ぶべきであろう。人間存在はこの両性格の統一である。それは行為的連関として共同態でありつつ、しかもその行為的連関が個人の行為として行なわれる。それが人間存在の構造であり、従ってこの存在の根柢には行為的連関の動的統一が存する。それが倫理の概念において明らかにせられた秩序・道にほかならぬ。(同書27-28頁)



第1図 人間諸科学関係図(I)



第2図 人間諸科学関係図(II)

この分析によって見れば、人の科学、人間科学、社会科学を併列するとき自然科学的な人の研究などは個人的、身体的な面が中心となり、社会科学的な人の研究は社会的、文化的な面が中心となり、その両面を媒介する身心、個人社会両面にわたる人の研究が人間科学的な研究になるといえよう。教育学、社会学、心理学の科学群は学術会議の部門としても第一部の第四部門にまとめられているが、まだ哲・史・文に対する総括的な名称を欠いている。人間形成学・人間関係学・行動科学等の名称も考えられ、教育学・社会学・心理学よりは包括的であるが、なお人間形成学は教育学に近く、人間関係学は社会学に近く、行動科学は心理学に近いといわねばならぬ。人間科学はその点、この三者に偏することなく、ほぼ中央に位置すると見ることができよう。大阪大学が教育学、社会学、心理学の統合学部の名称として“人間科学”の名を選んだことは、まことに妥当なことであったと思う。和辻博士が縷々綿密に分析した日本語の含蓄から見ても、日本の大学としてこのような人間科学部を設置することは、まことに光栄であり、誇りであり、世界に堂々とこの学部の体制と趣旨と名称とを宣示する価値は十分あると思うのである。

## 文 献

- Lewin, Kurt *Resolving social conflicts*. New York: Harper, 1948.  
 Lewin, Kurt *Field theory in social science*. New York: Harper, 1951.  
 Luria, A.R. *Neuropsychology as a behavioral science*. *Psychologia*, 1967, 9, 1-6.  
 佐藤幸治, 気の人間技術学, 哲学研究, 1944, 29, 26-53.  
 佐藤幸治, 気とモラールー人間総合科学への道—京都: 高桐書院, 1947.  
 佐藤幸治, 行動科学の発展と東洋人性学の立場, 京都大学教育学部紀要, 1962, 36-43.  
 新明正道編, 社会学辞典, 東京: 河出書房, 1944.  
 和辻哲郎, 人間の学としての倫理学, 1934, 岩波書店版全集第9巻, 1962.